慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	F・v・ハルデンベルクの政治思想と其の構造
Sub Title	F.V. Hardenberg's political thought and its structure
Author	本郷, 廣太郎(Hongo, Hirotaro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1952
Jtitle	史学 Vol.25, No.4 (1952. 9) ,p.73(506)- 103(536)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19520900-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

F・v・ハルデンベルクの政治思想と其の構造

本郷廣太郎

獨逸浪漫派の記念すべき同人雜誌「アテネウム（Athenäum）」が發刊されたのは十八世紀の末葉一七九八年のことであるが、此の結果、從來各地で單に分散的な活動を示すに止まつてゐた浪漫派は、思ひ掛けず、運動の中心據點を得ることゝなつた。刊行者のシュレーゲル兄弟は、同誌發行後、居をベルリンよりイェナに移してゐるが、此れは計らずもフィヒテ、シェリング、ティーク、ハルデンベルク[1]等を同地に誘ふ契機ともなつた。此處に一群の啓蒙思想家と古典派に對峙する獨逸初期浪漫派の結成を見るに至つた次第である。

此の初期浪漫派の同人には、前記の者の外にシュライエルマッヒェル、ヴッケンローダーの名前が見られ、更に、ゲーテの言に從へば、浪漫主義文學理論の創始者と目されてゐるシラーも指摘し得るのである。[2]從つて、獨逸浪漫主義は其の性格に於いて極めて豐潤なものを湛へてゐる譯であり、又同時に多彩的、多像的とも言ふべき面を有してゐるとも言へるのである。ヴルツェルに從へば、其れは人がより近く觀察すればするほど相反的な個々の現象のより偉大な充實の中に碎けて、我等を脅かす[3]が如き反面を備へてゐるものであつた。此の點に關する限り、其の中に一個の統一性を見出すのは困難と言ふ他はないが、此のことは、浪漫主義者が個人的に、孤立的にではなく、相互の間に於ける思索の深い

關聯と影響の中に其の思想を展開、發展せしめた事情を物語るものであらう。換言すれば、浪漫主義者相互の間には共通した、一貫せる思想構造とモティーフがあり、浪漫主義者の中の單なる一個人のみ捕へ來つたのでは其の思想内容を把握し得ないのである。從つて、ハルデンベルクを問題として取り上げるに當つても、先づ浪漫主義全體の把握が行はれなければ對象の解明は期し難いのである。

本稿に於いて主として檢討を試みたのは、ハルデンベルクの全般的な思想内容ではなく彼の政治思想であるが、彼を取り上げるに當つては次の諸點が注意されねばならない。其れは、彼が元來詩人であり、其の上、當時の獨逸の政治情勢が何等政治的情熱を換起し得るに足るものを持つてゐなかつた、と言ふことである。(4) 此處に、彼の政治思想に於ける詩的性格の存在と、空想的な現實否定性とを觀取し得る根據を認められよう。言はゞ、彼の政治的見解は其の詩人的個性と無關係ではなく、優れて彼の詩的表象の一部であつたのである。斯樣に考へる限り、ハルデンベルクの政治思想の解明に當つては、彼の内面的な詩人的個性に考慮を拂ふと共に、詩的表象の一部として此れを取り扱はねばならないであらう。

以上の觀點から、本稿に於いては、先づ浪漫主義の思想構造の解明を試み、次いで彼の政治思想――國家觀、ヨーロッパ共同體思想を捉へ、最後に獨逸國民に對する彼の特異な考察を究明の對象として取り上げることに依つてハルデンベルクの政治思想の全貌を描かうと期した次第である。

註　(1)　フリードリッヒ・フォン・ハルデンベルク (Friedrich von Hardenberg)。筆名ではノヴァーリス (Novalis) と稱してゐる。(一七七二―一八〇一)。

(2) ボルヒエルトは此のシラーと浪漫派の關係に注意し、其の交涉の次第を書翰等に依つて跡附けてゐる。H. H. Borcherdt. Schiller Und Die Romantiker, Briefe Und Dokumente. 1948.

(3) O. Walzel. Deutsche Romantik. I. Welt- und Kunstanschauung. 5te. Aufl. 1923. s. 1.

(4) 當時の獨逸に於ける唯一の統一的政治形式は神聖ローマ帝國であつたが、周知の如く此れは最早形骸に過ぎず、人々の關心を失ひつゝあつた。グーチは此の有樣をヴォルテールの言葉「如何なる意味に於いて其れは神聖であり、又ローマ的であるのか」並びにグーテの「愛する神聖ローマ帝國よ、如何にして猶ほ僅に存立するや（ファウスト。第一部。アウエルバッハの地下室）」を引用して描寫してゐる。G. P. Gooch. Studies In Modern History. 1932. The Political Background Of Goethe's. Life. p. 154.

一

浪漫主義理論を初めて文學的—美的に完成したのはフリードリッヒ・シュレーゲルである。(1) 周知の如く、彼はシラーの「素朴文學と有情文學に就いて (Über naive und sentimentalische Dichtung. 1795)」に依つて浪漫主義文學の萠芽を感じ、次いでゲーテの「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代 (Wilhelm Meisters Lehrjahre)」に於いて浪漫主義文學の內容を把握したのであるが、ハイムは此の間の事情を「常に新なる構成と新なる樣式に對し用意するところのあつたシュレーゲルは、ヴィルヘルム・マイスターから、眞正なるロマン (Roman) はあらゆる詩的なるものゝ極致 (non plus ultra)、又其の總計であると言ふ理論を創造した。そして彼は適確にも此の詩的理想を、浪漫的文學の名を以て表示した。(2)」と說いてゐるのである。要するに、彼に於いては、文學のあらゆるジャンルの上に位するのはゲーテの「マイ

スター」を其の典型とする小說（Roman）」であり、此れが浪漫的文學として捕へられてゐるのである。從つて、所謂「浪漫的（romantisch）」なる語は「小說的（romanartig）」と同意義であり、此の「マイスター」の特質から「浪漫的」の一般的觀念が、少くとも美的カテゴリーが引き出されてゐるのである。(3)

F・シュレーゲルに於ける浪漫主義文學の性格規定は以上の如きものであるが、此れは一個の文學理論としては猶ほ多くの必要條件を缺いてゐるものであり、其の體系化に於いては多分にフィヒテの援助を俟たねばならない所であつた。自我の他には何ものも存在せぬと言ふことを主張したフィヒテは、「知的直觀（intellektuelle Anschauung）」に關する理論に依つて、人間の完全な自由と動性を示したのである。フィヒテは、此の人間の完全な自由と動性とを倫理的に、且つまた峻嚴に解釋したが、此の理論を採用することに依つて、浪漫主義者は、彼等の所謂プロテウス的豹變性と輕易性の一支柱を見出すに至つたのである。(4)從つて、此のフィヒテの見解も、或る人々にとつては最も高尙な努力の支柱であり、崇高性の學校であることが出來たが、ティークが「ウィリアム・ローヴェルの歷史（Die Geschichte des William Lovell. 1795）」の中に描いたローヴェルの如く、薄弱にして不明晰な心情は却つて其れから毒を吸つたに過ぎない。(5)然しながら、フィヒテは其の講演「學者の使命に就いて（Über die Bestimmung des Gelehrten. 1794）」に於いて、「一切の非理性を自らに從はしめ、自由に、且つ彼自身の命令に依つて、其れを支配することこそ、人間の最後の究極目的である。人間が人間であることを止めず、且つ、神にならない限り、此の最後の究極目的は完全には到達し得ないし、又永遠に到達し得ないものとして殘るであらう。けれども、人間は此の目的に益々近附き得るし、且つ近附くであらう。其れ故に、此の目的への無限の接近こそ、人間としての、彼のまことの使命である。」と說く所があり、

F・シュレーゲルの浪漫主義文學理論は此れに負ふ所が少くないのである。卽ちシュレーゲルが、——浪漫的文學とは一つの進展的な宇宙文學（Universalpoesie）であり、此れは未だ生成のうちにある。勿論、此の文學が永遠に生成し、決して完全化しないことこそ、此の文學の本來の性質なのである。如何なる理論も此の文學を汲み乾し得ない。たゞ豫言的批判のみが、其の理想を特性附けようと欲することを敢て爲し得るに過ぎない。此の文學のみが自由であり、且つ、自らの第一法則として、詩人の自恣は如何なる法則をも自己の上に受けないと言ふことを認知するとき、其れは絶對に無限である[6]——と言つてゐる所を見ると、フィヒテの影響は決定的とも言ふことが出來るやうに思はれる。自由にして高次なる自我に依つて把握される所の、世界のあらゆる詩的なるもの、一切を含む普遍的なる文學の可能性、此れこそシュレーゲルの浪漫的文學と規定したものであつた。言ふまでもなく、此の文學は所謂憧憬文學に通ずるものを持つて居り、F・シュレーゲルに於いては其の理論的傾向に依つて必ずしもかゝる憧憬感情は多く表現されてゐないのであるが、彼の共同思索（Symphilosophieren）[7]の相手のハルデンベルクに於いて、より多く其の表現を見出すことが出來るのである。

以上說いた所は浪漫主義文學理論の初期の段階に位するもので、所謂浪漫主義思想と言ふには餘りにも其れは文學的であり、同時に他面に於いて、個性的なる自我と全體的・無限的なるものとの結合の試みが不充分な嫌ひがあつたのである[8]。此のことは、浪漫主義理論の貧困さを物語るものと言ふよりは、寧ろ浪漫主義理論形成の支柱としてのフィヒテ哲學の限界を示すものと言へよう。浪漫主義が、包括的統一的文學のみを追求しようとする立場から、宇宙現象の總ての包括的な、統一的な把握を試みる思想的、哲學的存在に步みを進めた時、此のことは明らかに立證される所であつた。

浪漫主義者は元々、其の浪漫的立場から、自然と精神（自我）とを同一のものとして、統一的に把握しようとする意圖を抱いてゐた譯であるが、フィヒテは自然への感覺が乏しく、精神のみを重視する傾きがあり、フィヒテの觀た自然は、精神に依つて征服さるべき障害であり、或ひは精神が自己を實現する質料に過ぎなくなる——と考へられたのである。換言すれば、浪漫主義者にとつては、フィヒテの自我は生きた自然の連鎖から引き離された化石であつた譯であり[9]、此處に此の兩者の統一的把握、ハルデンベルクの言ふ自然と精神の婚姻を扱ふ哲學が求められる機緣が存したのである。かゝる要請に應へたのは、他ならぬシェリングの自然哲學であつた。

處で、極く大別して見るならば、一八〇〇年頃のドイツ思想界には、二つの對立的な意見、卽ち全體として精神の立場に立つものと、自然と精神とは一つの統一に結合し得ると言ふ立場に立つものがあつた。前者に屬する者としてはカントとフィヒテがあり、後者に屬する者としてはヘルダー、ゲーテ、シェリングが擧げられよう[10]。フィヒテは其の哲學に於いて周知の如く自我（精神）から出發したが、シェリングは寧ろ自然から出發した。つまりシェリングは有機的自然を考へ、此れを單なる無機的自然よりもより高き勢位にあるものとしたのである。言はゞ、シェリングの自然哲學の課題は、自然が無意識的に取り行つてゐることを再び意識して遂行すること、「全自然に意識力を高めること」であつた。此處に於いて構成されたのは再生された自然、新たに創造された自然であり、フィヒテの如く自然と自我とに對立を置き、自我の外に自然を求めるのではなく、却つて双方が共通に沒入するやうな絶對的自同を唱へることであつた。

此の結果、シェリングの「絶對觀念論」的自然哲學は、浪漫主義者の、自然と精神を一體と見ようとする感情を、一つの學說にまで高め、哲學的正當性を與へることゝなつたのである。ハルデンベルクは「斷章（Fragmente）」に於い

て、「世界とは精神の總括的叱喩であり、其の象徴像である。」「外界は神祕狀態にまで高められた內界である。」「高級の哲學は、自然と精神との婚姻を論ずる。」等の言葉を殘してゐるが、其れはリカルダ・フーフが言ふ如く、「すべての人々の心に萌してゐた所の、さうしてシェリングに依つて意識にまでもちきたされた所の、自然哲學の根本思想の、雜多な、閃光的な表出に他ならない」[11]ものと言へよう。ハルデンベルクは次いで其の著「ザイスの學徒 (Die Lehrlinge zu Sais)」に於いて此の思想を表現して次の如く、

「一體、石や森が音樂に耳を傾け、其れに馴らされて、家畜の樣に意の儘になると言ふのは本當ではないのか？……私が話し掛ける時、まさに岩は一個獨自の〝汝 (du)〟にならないか？ そして又、心悲しく川波に見とれて、其の滑らかに流れ行く姿にすべての想ひを忘れてゐる時、私は流れ以外の何ものであらうか……。」[12]と述べる所があつた。

上述した所に依つて分る如く、シェリングに支へられた浪漫主義は一種の自然哲學のニュアンスを含むものであり、有機體思想を其の主要特色としてゐるのである。シェリングに依れば、自然は絕えず有機體に迫つて、其の生命を自己の化學的諸力に屈服せしめようとするが、生命を驅逐すべきものが却つて生命を維持する。有機體は自己の個體權を主張すべく自然に抵抗することに依つて、其の肢體を愈々威力ある武器に作り上げ、さて強められ精巧にされた能力を以て外來のすべての刺戟に當る。かくて、生存の爲の戰ひに於いて組織は複雜となり高級となる[13]——のであり、斯樣な思想に基礎附けられた理論は漸次浪漫派一般を惹き附ける所があり、殊に後述するハルデンベルクの國家觀に對する影響は顯著なものがあつた。

自然と精神との絕對的自同をシェリングは絕對的理性と名附けてゐるが、此の絕對的理性は二つの系統——自然が優

勢である系統と精神が優勢である系統――に展開するものとされて居り、絶對者は此れ等の特殊的現象のそれ〴〵に完全には表示されないのである。(14) 此處に於いてシェリングは、絶對的理性の完全な展開は宇宙の中にのみ、現象の總體の中にのみ可能であるとした。故に、宇宙は絶對的有機體であり、シェリングは同時に此れを絶對的藝術品とも考へたのである。(15) F・シュレーゲルの宇宙文學（Universalpoesie）の理論は此のシェリングの說と合し、此處に所謂浪漫主義思想が成立する。卽ち、絶對的藝術品は宇宙そのものであるから、宇宙或ひは絶對者は文學（Poesie）に依つてのみ把握される。從つて此處に浪漫的文學は、絶對者の把握を使命とするファウスト的思想にまで生長したのである。

此のことは、指摘するまでもなく、浪漫主義理論の新たなる發足と言はなければならない。ところで、此の生長した浪漫主義に於いて注意すべきは、有機體思想と並んで浪漫的、綜體的とも言ふべき新しい事象把握の方法を併有してゐることである。此れは、一つの現象を全體として理解しようとするもの――世界現象であろうと或ひは其の一部分の現象であろうと、觀察と價値附けに於いて全體と統一とへ迫らうとする願ひであり、(16) 此れに進んで理論的支柱を與へたのはシュライエルマッヒェルであつた。

シュライエルマッヒェルは一七九九年の春、「宗教について。宗教輕視者中の教養人に寄する講演（Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern）」なる著書に於いて、一切の有限者の中には無限者を瞥見することが出來、そして其れは宗教的過程の中にのみ可能である――と言ふことに依つて浪漫主義者に深刻なる宗教的影響を與へると共に（後述）、マリー・ヨアヒミが言ふ所の「個性の深淵（Abyssus von Individualität）」であると同時に「最高の力を持つた個體そのもの（das Individuum selbst in der höchsten Potenz）」なる神の存在を知らしめたのである。(17)

シュライエルマッヒェルに從へば、個性的なるものは無限であり、其れは無限者の表現と鏡とである。より高い意味の個性、卽ち人間の個性は、無限者と有限者との婚姻から生ずる。各々の人間は個性であるが、すべての個性には、人間性の本質を形成する力が結ばれてゐるに過ぎない。各々の人間は人間性の一綱要になるのであり、若しも、人間が自己自身の中にも無限者を見出したならば、宗教は完成されることになる——とされて居り、斯様にして彼は宗教的意味を以て有限者と無限者とが結合すべき人間存在を考へたのである。浪漫派がとり上げたのは此の思想であるが、更に其れは個と全體との同時的把握、抽象的全體者と結合すべき個々の人間或ひは現象の獨自性の解明に突き進んで居り、シェリングに於いて多少其の重要性を減ぜられた個性的存在の價値は、此處に於いて、綜體的把握の方針を失ふことなく再認識されることゝなつたのである。かくてフィヒテに出發した浪漫主義思想の理論的形成は、シェリング及びシュライエルマッヒェルに依つて此處に其の完全な形姿を得るに至つたのであつた。

註 (1) O. Walzel. Deutsche Romantik. I. Welt-und Kunstanschauung. 5te. Aufl. 1923. s. 27.
(2) R. Haym. Die romantische Schule. 1870. s. 251.
(3) A. O. Lovejoy. Essays In The History of Ideas. 1948. X. The Meaning Of 'Romantic' In Early German Romanticism. p. 184.
(4) O. Walzel. Ibid. s. 32.
(5) R. Huch. Die Romantik. 1924. I. Blütezeit der Romantik. s. 155.
(6) Athenäumfragment. 116.
(7) R. Huch. Ibid. s. 75.

（8）F・シュレーゲルは、有限的に限定された人間が宇宙文學（Universalpoesie）を把握する方法として、自らの不十分性の意識の上に立つて、自らの精神を通して此の不十分性を乘り越える方法――卽ち浪漫的イロニー（romantische Ironie）――を說いてゐる。

（9）R. Huch. Ibid. s. 161.

（10）O. Walzel. Deutsche Dichtung Von Gottsched Bis Zur Gegenwart. II. 1930. s. 34ff. (Handbuch Der Literaturwissenschaft.)

（11）R. Huch. Ibid. s. 169.

（12）Novalis. Gesammelte Werke. Mit einem Lebensbericht. Herausgegeben von Carl Seelig. Ziirich 1945. I. Die Lehrlinge zu Sais. s. 389～390.

（13）R. Huch. Ibid. s. 166.

（14）例へば人間の組織に於いては未だに物質的要素が勝つて居り、藝術家の傑作に於いては理念的要素が勝つてゐる――と言ふ風に。

（15）O. Walzel. Deutsche Romantik. s. 41～42.

（16）Ibid. s. 43.

（17）M. Joachimi. Die Weltanschauung der deutschen Romantik. 1905. s. 39.

二

以上述べた如き浪漫主義思想に於いて使用されてゐる諸々の契機は、單に其の普遍的文學理論の中に於いてのみ使用されてゐた譯ではなく、一般的な人事現象を觀察する場合にも適用されてゐる所である。其の政治思想――殊にハルデ

ンベルクの其れ――に於いて用ひられてゐるものはフィヒテの自我哲學、有機體思想、綜體的把握の方法及び（後述するところの）浪漫的宗教の四者である。ハルデンベルクの政治思想は、まさに此の四者の相互協同作業とフランス革命の影響の下に、生み出されたものであつた。

ハルデンベルクの政治思想の中で先づ問題になるのは、彼が個人と社會とを、又此の兩者の關係を如何なるものとして觀察したか、と言ふ點である。此の點に關しては、フィヒテの「知識學（Wissenschaftslehre）」は彼に强烈な感銘を與へるものがあつた。[1] フィヒテは、雄大な規模と革命的な確信を以て、社會形成の新理論を進め、文化の目的はすべてのものゝ獨立自生であるとし、同時にフランス革命の唱へる平等の思想の前に色蒼ざめた個人的自由に一個の權利を與へたのである。[2] 此のフィヒテの思想の影響を受けたハルデンベルクは、先づ社會の本質としての人間の至上性を認識したが、同時に社會其のものゝ價値と性格を輕視することなく、社會其れ自身の人格をも認めるに至つたのである。ハルデンベルクは、「社會的な話題は强壯劑以外の何ものでもない。此れは其の選擇、其の變化、其の取扱ひを限定する。社會は共同生活に外ならない。即ち一個の區分し得ない、思考し感ずる人格である。各人は一個の小社會である。[3]」と述べて個と全體との同時的把握を行つてゐるのであるが、此れは浪漫的な特色であり、綜體的把握が巧みに適用されたものであろう。

次いで彼は社會と人間との具體的な關係を考慮し、先づ人間を社會集團の四肢に準へ、[4] 其のことを次の如き暗示的斷片に於いて說明してゐるのである。即ち「動物或ひは自然の中に於ける人間は、國家及び哲學が其の關係の中にあるもの、即ち聯合體である。[5]」「國家、敎會、結婚、社會、公衆は、我々の本來の人間的關係に――即ち理性的動物の無限な

る聯合に於ける我々の存立に、固有の關聯を持つところの明瞭なる概念である。」[6]次に社會に關しては、「社會衝動は組織衝動である。此の精神的な同化作用に依つて屢々一般的なる構成要素から一個の良き社會が、一人の聰明なる人間の周圍に成立する。」[7]と述べて、人間集團を單に無政府的に放置された個人の集合とはせず、社會的に構成されたものとしてゐるが、此處に有機體思想の影響が認められることは言ふまでもない。所謂無機的自然は人間世界に適用されて一般的なる構成要素となり、更に組織衝動に依つて構成された社會は有機的自然に當るのであらう。從つて、人間は社會的に構成されることに依つてのみ、單なる生存から更に高度なる生存へと向上し得るのである。

以上の如く、ハルデンベルクは人間を常に共同體との關聯の中に考察してゐるのであるが、彼は其の共同體を社會にのみ限定せず、其の領域を現實の國家にまで擴張するに至つたのである。全般的に見て、當時に於ける獨逸人一般の政治意識が甚だ低かつたのは言ふまでもない所である。思想界の指導的地位にあつたヴィマールの古典派の間にも、漠然とした意味に於いて獨逸的共同性を感ずることはあつても、現實の國家、卽ち獨逸に於ける領邦國家の存在に思想的顧慮を拂ふ者は稀であつた。ハルデンベルクが注意を促したのは此の面であり、[8]彼は、「國家は、我々の許に於いては告知されることが餘りにも僅少である。國家の告知者、愛國心の傳道師がなければならぬ。現今大多數の同國人は國家に對して甚だ一般的な、敵對的なものに甚だ近いやうな立場にある。」[9]「人間は國家を怠惰の褥になさうと努めたが、國家はまさに反對のものであるべきである。國家は緊張せる活動の武裝である——其の目的は、人間を絶對的に强力ならしむるのであつて絶對的に弱めんとするのでなく、怠惰なる存在にではなくして活動的なる存在にすることである。國家は人間を勞苦から解放せずして、寧ろ其の辛苦を無限にまで增加する……。」[10]と述べて、現實の國家を重視してゐたの

である。

ハルデンベルクの國家觀に於いて注目を惹くのは、其の國家構成に關する特異な考へ方であらう。彼は、「國家は常に本能的に人間の本性の相對的なる見解と知識とに從つて區分されてゐた。國家は常に大人間（Makroanthropos）であつた。諸々のツンフト（Zünfte）＝四肢及び個々の諸力、階級（Stände）＝能力。貴族は道德的能力、僧侶は宗教的能力、學者は知性、王は意志であつた。譬喩的人間。」[11]と述べてゐるが、此の國家構造論が、有機體思想の直接的支配下にあることは言ふまでもない所である。無機的自然は政治世界に於けるアナーキーであり、構成された自然即ち有機的自然は勿論國家に該當するものであらう。シェリングの自然哲學に於いては、有機體は自己の個體權を主張すべく自然に抵抗することに依つて、其の組織を發展させて行くべきを說いてゐるが（既述）、アナーキーに抵抗して成立した國家に於いても組織――即ち階級及び能力が存在するのである。かくてハルデンベルクの考察した國家は有機體としての國家であつたと言へよう。

猶、此の國家構造論に於いて注意さるべきは、彼が貴族の存在を認めた點である。勿論彼は其の特權の故にではなく道德的能力と言ふ社會的機能の故に其の存在を認めたのであるが[12]、貴族階級が其の政治的優越を殆ど回復し得ないまでに失ひ、餘り重要な存在ではなくなつてゐた時、此れを浪漫的に再認識したと言ふことは興味あることである。此れは取りも直さず彼の反革命的な思想の表明であつた。當時、貴族制度は傳統の保守的原理を象徵し、貴族は堅實な政治的發展を保證する要因と見られて居り、殊にフランス革命の後、貴族は、アナーキーの潮流に逆ひ得る諸力の具體化と見られる傾向が强まつてゐたのである。[13]

次に問題になるのは、ハルデンベルクの理想とした國家の形式である。此の點に於いて彼の注意を惹いたのは、當時のプロイセン國家であつた。マイネッケは此の間の事情を、「別して既にプロイセンは、若々しい君主の一組フリードリッヒ・ヴィルヘルム三世とルイゼが其處に一つの新しい、前途の幸運を告げる時代を齎すかに見えた瞬間に於いて、彼の眼を惹きつけた。ハルデンベルクはかゝる君主の一組から發せられた人の心を奮ひ起すやうな作用に沒頭し、其の廻りに象徴化的考察の蔓を張り廻らしたのである。」[14]と巧みに述べてゐるが、一連の政治的斷片集「信仰と愛、或ひは王と王妃 (Glauben und Liebe oder der König und die Königin)」が成立したのはかゝる背景からであつた。

此の斷片集の中で彼が語つてゐることは、プロイセン王フリードリッヒ・ヴィルヘルム三世と王妃ルイゼの讃美、更に此れと關聯して理想的國家形式である君主國[15]の描寫であるが、其れは勿論浪漫的觀點に於いてなされてゐるのである。其の契機は主としてシュライエルマッヒェルに依つて與へられてゐるが、既述した如く、シュライエルマッヒェルは有限者の中には無限者を認め得、其れは宗教的過程に於いて可能であるとした。此の思想はハルデンベルクの國家觀に於いて應用され、有限者は一般國民、無限者卽ち全體者は國家であると考へられたのであらう。彼は更にA・W・シュレーゲルの見解——美は無限者の象徴的表現である——を應用して、國家の象徴的表現として王、王妃、或ひは宮廷を想定してゐるやうであるが、此れから、理想的國家の國民は、君主への憧憬的・宗教的關與に依つて國家を構成し、其の政治生活を營む……と言ふ彼の國家理論が導かれて來るのである。ハルデンベルクにとつては、宗教が人間に與へ得る最も強い力は、信仰に依つて與へられるものであり[16]、從つて其れは國民の政治生活の「賴みの綱」[17]、國家形成の要因になり得る性質のものであつたのである。

以上の如き解釋を裏附ける斷片は、此の「信仰と愛」の中に屢ゝ見受けられる所であり、例へば、「國王は國家の堅實なる生活原理であり、太陽が遊星組織に於ける所のものと全く同樣である。第一に、生活原理の周圍には國家に於ける最高の生活、光の雰圍氣が生産される。多かれ少かれ、其れは各國家市民(Staatsbürger)の許に於いて鑛化せしめられる。從つて、國王の近くにゐる國家市民の意志表示は絢爛たるものであり、可能なる限り詩的であり、或ひは又最高の振興の表現であらう……。」[18]「……君主國は眞正なる組織である——何となれば、其れが絶對的な中心點に結合してゐるが故に、人性に屬してゐて國家に屬してゐない存在に結合してゐるが故に。國王は現世の運命にまで高められた人間である。此の詩は、人間には必然的に湧いて來る。其れのみが人間の本性のより高き憧憬を滿たすのである。すべての人間は王位に適するやうになるべきである。此の遙かなる目標への教育手段が國王である。彼は其の臣民の集團を、漸次自己に同化させる……。」[19]「宮廷は元來世帶の大なる模範である。宮廷に倣つて國家の大なる世帶が形成され、此れに倣つてより小なる世帶が、そして更により小なる世帶が——と言ふ風に形成されて行く。宮廷の改革はどんなに力強い感化を及ぼすことだらうか……。宮廷は大規模な古典的私生活であるべきである……。」[20]「……王妃の示される模範は、兎に角無限に多くの影響を與へるであらう……。」[21]「教養ある婦人と注意深い母親は誰しも王妃の肖像を彼女の居間と娘達の部屋に持つべきである。さうありたいと願ふ婦人の各々の前に置かれた原像への、何と言ふ美しい、力の籠つた訓戒であらう。王妃との相似は新しきプロイセン婦人の特性であり、其の國民的特徴であらう。……かくして、國王夫妻が絶えず家庭生活と公共生活とに織りこまれることに依つて、眞正の愛國心が生ずるであらう。」[22]等の事例を引き合ひに出すことが出來るのである。

以上に依つて、ハルデンベルクの理想とした國家形式が、君主に對する國民の憧憬的・宗教的關與に依つて構成される君主國であつたことは明かである。然し、彼は君主國全般を讃美したものではなかつた。プロイセン國王フリードリッヒ二世は所謂啓蒙專制君主であり、全體の福祉を最高の目的とし、國王は其の手段たるべき第一の官使であり、國民は單に臣民として最も平凡無趣味な任務に對し全人間的なる義務感と緊張とを求められたのに過ぎなかつたので、ハルデンベルクは斯の如く國家共同體への人格的關與を認めぬ立場には强く反對してゐるのである。卽ち「信仰と愛」に於いて、彼は、「如何なる國家も、フリードリッヒ・ヴィルヘルム一世の死以後に於けるプロイセンほど、工場として經營されたことはない。斯の如き機械的な行政は國家の肉體的な健康、强化、及び有能の爲には恐らく必要であらうが、然し國家は、單に此の流儀に於いてのみ取り扱はれると、本質的には其の爲に破滅する……。」[23]と述べて、個性の至上權を認めぬ君主國を排擊したのである。獨立した强大な其れ自身の人格を持ち、マクロアントロポスであるところの國家と、至上權を有する個性との二つを想起し、此の兩者の結合に何等矛盾を認めぬのは浪漫的綜體的把握の立場からは當然のことであり、從つてハルデンベルクの國家觀に於いては、「同時に眞の共和國である様な理想的君主國に就いて夢みることが實際充分に可能であつた」[24]と言へるのである。

ハルデンベルクにとつて眞の共和主義とは「あらゆる國家の成員が全國家に一般的に參與し、內面的に接觸し調和する。」[25]が如き狀態であつたゝめ、彼にとつては其の理想とする君主國は共和國と同じものになるのである。此の點に就いて、彼は次の様に、「共和國と君主國とは聯合文書に依つて完全に結合される。國家には幾多の必然的な段階がなければならぬが、其れ等は聯合に依つて結合されてゐなければならぬ……。」[26]「共和國なくば國王は成立ち得ず、國王なくば

共和國が成立ち得ぬと言ふこと、兩者は肉體と靈魂の如く不可分離であると言ふこと、及び共和國なき國王と國王なき共和國とは單に意味なき言葉に過ぎぬと言ふこと——此れ等のことを人が一般に確信する時が來るであらう。そして其れは間も無いことである。其の理由から、國王は眞正なる共和國と共に、そして共和國は眞正なる國王と共に常に同時に成立したのである。眞正なる國王は共和國であり、眞正なる共和國は國王であるだらう。[27]」と述べ、理想的國家形式は君主國と共和國の二つの概念が交會し並存するものとしたのである。ヤコプ・ヴァクサがかゝるものを名附けて「混合國家形式 (Die gemischte Staatsform)[28]」と呼んでゐるのは周知の所である。

猶、ハルデンベルクの國家觀に於ける反革命的傾向に關しては、彼の共和國觀を一瞥すれば充分であらう。彼にとつては共和國は君主國と對立する概念ではなく、國王の存在に依つて成立し得るが如きものであり、此の點に於いて彼はフランス革命の所産としての所謂共和國の概念を退けてゐたのである。[29]

註(1) J. Baxa. Einführung in die romantische Staatswissenschaft. 1923. s. 52.
(2) A. Poetzsch. Studien zur frühromantischen Politik und Geschichtsauffassung. 1907. s. 16.
(3) Novalis Schriften. Herausgegeben von J. Minor. Bd. 2. s. 120. Fr. 44.
(4) J. Baxa. Ibid. s. 53.
(5) Novalis Schriften. Bd. 3. s. 39. Fr. 197.
(6) Ibid. s. 36. Fr. 173.
(7) Ibid. Bd. 2. s. 123. Fr. 59.
(8) F. Meinecke. Weltbürgertum und Nationalstaat. 7te. Aufl. 1928. s. 65.「其の力強い擴張欲を以て今や急速且つ略取的

に、古典的理想主義が猶ほ未だ無關心であつた領域へと突き進んで行く。」

(9) Novalis Schriften. Bd. 2. s. 270. Fr. 291.

(10) Ibid. s. 270. Fr. 288.

(11) Ibid. s. 270. Fr. 290.

(12) R. Aris. History Of Political Thought In Germany, From 1789 To 1815. 1936. p. 268.

(13) Ibid. p. 269

(14) F. Meinecke. Ibid. s. 66.

(15) 「ノヴアーリスの理想的國家形式は君主國である。」J. Baxa. Ibid. s. 56.

(16)(17) R. Aris. Ibid. p. 272.

(18) Novalis. Gesammelte Werke. Herausgegeben von Carl Seelig. 1945. II. Glauben und Liebe oder der König und die Königin. s. 54. Fr. 131.

(19) Ibid. s. 55. Fr. 132.

(20) Ibid. s. 59. Fr. 143.

(21) Ibid. s. 58. Fr. 141.

(22) Ibid. s. 60~61. Fr. 144.

(23) Ibid. s. 62. Fr. 150.

(24)(25) F. Meinecke. Ibid. s. 67.

(26) Novalis Schriften. Bd. 2. s. 269. Fr. 286.

(27) Glauben und Liebe. s. 56~57. Fr. 136.

(28) J. Baxa. Ibid. s. 60.

(29) ハルデンベルクは次の様に言つてゐる。「當今諸侯に向つて美辭を連ねて演説し、新しいフランス流儀より外には何處にも

平安は確立されず、又共和國をもたゞ代議形態のもとにのみ認容し、上院と下院、執政府と參議員、市廳と自由の樹が存在する處だけが共和國であると明白に主張する人々は、精神に於いて空虚であり心情に於いて貧しい憐れむべき俗物である……。」 Glauben und Liebe. s. 57. Fr. 137.

三

ハルデンベルクの國家觀に次いで檢討さるべきは、彼のヨーロッパ共同體思想及び其の理念としての浪漫的宗教觀である。

ハルデンベルクの宗教觀即ちキリスト教觀は、二種のものに分けて考へられよう。即ち一は「死の宗教」としてのキリスト教であり、他はキリスト教的歷史哲學である。此のキリスト教的歷史哲學に於いて彼のヨーロッパ共同體思想が結びつくのであるが、最初に見るべきは彼のゾフィー體驗である。若くして世を去つた愛人ゾフィーへの追慕の情は、彼を驅つて彼岸に於けるゾフィーとの結合を希求させ、更に「意欲の死 (gewolltes Sterben)」をも考へさせる所があつた。ハルデンベルクに於ける此岸世界と彼岸世界の密接なる結合は斯樣な彼の內的體驗に依るのであるが、又一面シュライエルマッヒェルに負ふ所も多いのである。シュライエルマッヒェルは夙に有限者と無限者の結合が宗教的過程に於いて可能であることを唱へてゐたが、ハルデンベルクは此の點から此岸と彼岸とを結合すべき死の宗教としてのキリスト教を想定したのである。F・シュレーゲルが一七九九年三月のハルデンベルク宛の書簡に於いて、「けれども、古典的宗教が生の宗教であるよりも、キリスト教は更に死の宗教ではないだらうか？ 恐らく君は、我等の時代に於いて

死に對して藝術的感覺を持つた最初の人です。」[1]と述べてゐるのは、こよなくハルデンベルクのキリスト教思想を明證するものであらう。

敬虔主義（Pietismus）の流れを汲んで「仲介者（Mittlertum）」としてのキリストを考へたハルデンベルクにとつては、マリアも、又亡きゾフィーも永遠の國（或ひは彼岸世界）への仲介者の役割を果すものであり、此處に彼の多くの宗教的歌謠が成立する根據があつたのである。ヴィルヘルム・ディルタイは彼の「聖歌（Heilige Lieder）」を賞揚し、此れ等の諸歌に於いて、マリアに捧げられた歌に繰り擴げられた極めて單純な感覺の魅力は一切を凌ぐものである、として次の句を引用してゐる。[2]「我マリアを見し日より、夢幻の如く此の世の喧囂消え去りて、言ひ知れぬ甘き大空、永へに我が心に宿りぬ。冀くは只一度我に悅びの兆を與へ給へ。我が幼なかりし日、幾度かマリア我が夢路に立ちしぞ……。」次に、彼の「夜の讃歌(Hymnen an die Nacht)」第三章に於ける、「……我戀人の手を取れば、溢るゝ涙は光り輝やく斷ち難き紲となりぬ。數千年は嵐の如く、遠く下界へ過ぎ行きぬ。戀人の項に、我新たなる生を感じつゝ恍惚たる涙を注ぎぬ。此れ最初の、又唯一の夢なりき。爾後、夜空と其の光、又戀人への永遠にして不動の信仰を、我は覺えぬ。」[3]との句は、仲介者としてのゾフィーを想定して餘す所がないものであらう。

キリスト教の浪漫的把握に次いで問題になるのは、ヨーロッパ共同體の思想を産み出したキリスト教的歷史哲學である。此の歷史哲學的主題が取り上げられてゐるのは「夜の讃歌」第五章であるが、此處で明らかにされてゐるのはキリスト教の古代への關係、「考古學者の宗教」への關係である。其の內容を略述すれば、ハルデンベルクは古代を以てあらゆる物象に神が宿り、天の神と地の民との交歡に花やぐ時代であつたとする。が、人間が成長して漸次童心を失ひ、

より自由な國土に赴かうと努力するやうになる。此の人間の僭上を悲しんだ神々は消え去り、世界には生命が失はれる。此の時イエズスが出現し、人間の救濟を計つたが、彼は人類の深い墮落の犧牲となつてしまふ。が、烈しい不安のうちに新しい世界の誕生は近附き、遂に永遠の愛の救ひの手が差し伸べられる[4]——とされてゐるが、此處で注目すべきは、彼のキリスト教的歴史哲學に二つの見解があることである。卽ち一は、(單に歴史哲學的著作に於いてのみならず、他のものにも見出されるが)「Unschuld の理想的時代から分裂の時代へ。そして更に第二の Unschuld の時代へ」と言ふ見解であり、他はヴルツェルが言ふやうに、「現在の、絶對的抽象化、根絶化——此れより生ずる未來の、此の本來のより良き世界の神化」と言ふキリスト教の命令である。[5]此の二つの見解を次の如く、「過去を Unschuld の時代として憧憬的に讃美し、現在の情勢を否定する。而して此處に現在の絶對的抽象化、根絶化を行ふと共に、且ての Unschuld の時代を理想として未來に期待する」と組み合はせて考へることが出來るならば、其の歴史哲學的性格を明確に措定し得るやうに思はれる。此處では、最初の Unschuld の時代が古代になつてゐるが、此れをキリスト教的中世の中に視るやうになつて、彼のキリスト教的歴史哲學は完成するのである。然し此の點に關しては、獨逸浪漫主義に於ける中世主義の考察が要請されるであらう。

獨逸浪漫派に中世主義を導入したのはヴッケンローダー (Wackenroder) である。彼はハーマンとヘルダーの弟子であり、民俗的個性を其の藝術的刻印の中に理解する能力を多分に具へてゐる者であつた。[6]彼が中世獨逸の藝術に眼を開いたのはティークと共にした一七九三年夏のエルランゲン旅行に於いてゞあるが、彼は、若きゲーテがシュトラスブルクの寺院建築を讃美した如く、次の樣に、「イタリアの青空と莊嚴な圓屋根とコリント風の柱のみならず、アーチと唐

草模様の建築物とゴシック風の塔のもとにも、眞の藝術は成長する（藝術を愛好する一修道士の心情の流露。Herzensergiessungen eines kunstliebenden Klosterbruders)」と述べてゐるのである。此れに依つても分る通り、ヴッケンローダーは中世獨逸の藝術――殊にデューラーの繪畫を究明しつゝ、明らかに理想化され、感情化された獨逸の過去の姿を描いたのであつた。斯の如き見解がティークを通じて浪漫派に導入され、浪漫主義者は中世獨逸と中世藝術、及びカトリックの美的要素に引かれて行つたのである。

ハルデンベルクのキリスト教的歴史哲學が完成したのは斯様な中世主義の影響を受け、最初の理想的 Unschuld の時代を古代からカトリック的中世へと移すことに依るものであり、同時に其のヨーロッパ共同體思想も成立したと見ることが出來るのである。此れは彼の論文「キリスト教世界或ひはヨーロッパ (Die Christenheit oder Europa)」に於いて極めて詳細に敍述されてゐる所であり、冒頭、彼は、「且てヨーロッパが一つのキリスト教的な國土であり、此の人間的に形成された世界部分を一つのキリスト教世界が占有して居り、一つの偉大にして共通の關心が、此の廣大な精神的帝國の最も遠隔な諸地方をも結合させてゐた美しい、光輝ある時代があつた。大なる世俗的財産なくして一人の支配者が、强大なる政治的諸力を支配し、結合させてゐたのである……。(7)」と述べ、次いで、「……此れ等の聖なる人々に依つて安全な未來が用意され、彼等に依つて總ての過失が赦され、彼等に依つて總ての汚れた生の場所が解放され淸められた時、各人は其の現世の日々の仕事をどんなに快く遂行し得たであらうか……。(8)」と誌し、更に、「此れが眞にカトリック的、或ひは眞にキリスト教的な時代の、美しい、本質的な傾向であつた……。(9)」と說いてゐるのである。

以上に依つて、ハルデンベルクの理想化した中世（卽ち第一の Unschuld の時代）に於いては、カトリック教會が、

單に人間の精神生活をのみならず一大政治的共同體を支配し、管理するものと考へられてゐたことが解るのである。此れが人間の悟性の發達に依つて破壞せしめられ、悲しむべき精神的・政治的分裂の時代、卽ち現在が成立することを述べてゐるのであるが、ハルデンベルクは宗教改革を以て其の責任者と見做してゐるのである。宗教改革は世俗的學問を以て宗教を解釋し、信仰と知識を分離せしめたのみならず、宗教に對する世俗性の優越を確立したとし、「……然しながら彼等は其の過程の必然的な結果を忘却し、分離すべからざるものを分離させ、分割すべからざる教會を分割し、其れを通じて、且つそれに於いてのみ眞正の永續的再生が可能であつた所の普遍的キリスト教的聯合から、暴虐にも自己を引き離した……。」[10]「……總じてルーテルはキリスト教を勝手に取扱ひ、其の精神を誤解して別種の文字と別の宗教を導入した。卽ち聖書の神聖なる普遍妥當性である。遺憾乍ら其れに依つて、一個の甚だしく異常な地上の學問が、宗教問題の中に混入された——卽ち言語學であり、其の消費的な影響は爾後明白なものである……。」[11]と述べてゐるのである。

此の様に宗教改革は、ハルデンベルクに於いては、カトリシズムに依つて生み出された精神的な調和（ハルモニー）を破壞し、同時に近世の國家世界の分裂を紹いたものとされて居り、プロテスタンティズムは單に宗教的運動であるのみならず又政治的運動でもあり、ヨーロッパの政治組織を根本的に變更したものと考へられてゐるのである。[12] 卽ち、カトリック教會の權威がプロテスタンティズムに依つて破壞せられた故に、世俗諸國家の自己主張が行はれ、從來とは逆に、宗教の政治への隷屬が見られるに至つたと說かれてゐるのである。ハルデンベルクは更に此の點に關し次の如く、「……彼等はあの高い影響から解放されたことを悅び、そして新しい宗教局を今や自己の君主的保護と指導のもとに引き受けた。彼等

はプロテスタント教會の全面的結合を妨害しようと熱心に配慮し、かくして宗教は非宗教的にも國家の限界内に監禁され、其のために宗教的世界主義的關心の漸次的崩壞への基礎が置かれたのである。かくて宗教は其の偉大なる政治的平和建設の影響を、キリスト教世界の結合し個性化する原理の本來的役割を失つた……。(13)」「近代的な政治は此の時期に始めて發生し、そして個々の强力な國家は空位にあつた世界の王座を――其れは政治權に姿を變へたのであつたが――占取しようと企圖したのである。(14)」と述べてゐるのであるが、要するに政治の世俗化は、ハルデンベルクには墮落であり簒奪であると思はれたのである。(15)彼は更に、「靜に、偏見なく、眞の觀察者は新なる國家顚覆の時代を眺める。彼にとつて、國家顚覆者等はシシフスの樣に思はれないであらうか。彼が平衡の尖端に達した其の時、既に巨大なる重荷は再び他の側へと轉がり落ちて行く。天上への引力が其れを高所に於いて漂ひつゝ支へぬ限り、其れは決して上に留まりはしないのである……。(16)」と言つてゐるが、此れは取りも直さず近代國家の沒落を豫言したものに他ならないのである。

第二の Unschuld の時代、卽ち期待さるべき理想的な未來に關しては、「君等の國家が地上への傾向を保有する時、總ての君等の支へは餘りにも虛弱である。然し、其れをより高き憧憬に依つて天上の高所に結び附け、其れに天地萬物に對する關係を與へるならば、其の時君等は決して疲らされぬ翼を其處に所有し、そして君等の努力が豐かに報いられるのを見るであらう……。(17)」と述べてゐるが、此れはハルデンベルクのヨーロッパ共同體思想を明らかに示したものであらう。彼は世俗國家を絕對的な政治的單位とは見ずに、其の上に存在すべき一個の秩序を想定するのである。其れは「世俗的であると同時に超地上的でもある第三の(18)要素」なるカトリック的教會組織であり、此れに對して「ヨーロッパ宗教會議 (europäisches Konzilium)」の名を付して、政治的には全ヨーロッパを指導し、精神的にはプロテンタンティ

ズム及び啓蒙思潮等非カトリック的傾向總てをカトリック的精神に再合一すべきもの、としたのである。「キリスト教世界は再び生き生きと又活動的になり、國境を顧慮することなく、總ての超地上的なものを渇望する魂を其の膝に取り上げ、悦んで新舊兩世界の仲介者となるべき一個の可視的な教會を自ら形成しなければならぬ……一つの尊敬すべきヨーロッパ宗教會議の聖なる膝からキリスト教世界が出現し、そして宗教覺醒の事業を一つの包括的神的な計畫に從つて行ふであらう……。」[19]と述べてゐるのは斯様な點を立證して餘す所がないのである。

最後に、此のヨーロッパ共同體思想に於いて注意すべきは本來のカトリック教會との關係である。「キリスト教世界或ひはヨーロッパ」に於いては確かに多くのカトリック的色彩が存するが、敬虔主義の深い影響のもとに育ち、ヤコプ・ベーメの思想を研究したハルデンベルクがカトリック信者であつたとは言ひ得ぬ所であり、其れは結局自己の理想像を描寫するためカトリック的なものを使用したに留まり、カトリック其のものへの信仰告白ではなかつたのである。此の點に就いてはリカルダ・フーフが左記の如く、「ハルデンベルクは全きカトリック教の時代を、調和の——分裂に先立つ調和の——從つて言はゞ無意識的な、必然的な、而して其れ故に無價値にして不安定な完全性の時代と見做した。プロテスタンティズムは分裂を意味する。其れは、其れ自身としては厭ふべく悲しむべきものであるが、目的に達する手段として、意識化の最初の徴しとして、必要缺くことが出來ない。今や將に再融合の時が到らうとしてゐる——ハルデンベルクは其の近きを信じた——、意識的な、自由な統一、一種の、然し將に新しき種類のカトリック教、意識的完成が無意識的完成と、聖者が小兒と異るが如く舊いカトリック教と異る新しいカトリック教。と言ふのがほゞ、此の華麗を極めた散文＝熱狂的頌歌の赤裸なる思想過程である」[20]と述べてゐるのであるが、此れは誠に傾聽すべき見解であると

言はねばならないであらう。

註（1）O. Walzel. Deutsche Romantik. s. 67.
（2）W. Dilthey. Das Erlebnis Und Die Dichtung. 1921. s. 320.
（3）Novalis. Gesammelte Werke. Herausgegeben von Carl Seelig. 1945. I. Hym nen an die Nacht. s. 12.
（4）Ibid. s. 15～22.
（5）O. Walzel. Ibid. s. 68.
（6）Ibid. s. 81.
（7）Novalis. Gesammetle Werke. V. Die Christenheit oder Europa. s. 10～11.
（8）Ibid. s. 11.
（9）Ibid. s. 14.
（10）Ibid. s. 16.
（11）Ibid. s. 17～18.
（12）R. Aris. History Of Political Thought In Germany, From 1789 To 1815. 1936. p. 273.
（13）Die Christenheit oder Europa. s. 17.
（14）Ibid. s. 19.
（15）F. Meinecke. Weltbürgertum und Nationalstaat. s. 74.
（16）（17）Die Christenheit oder Europa. s. 25.
（18）Ibid. s. 31.
（19）Ibid. s. 34.
（20）R. Huch. Die Romantik. I. Blütezeit der Romantik. s. 354.

四

ハルデンベルクの政治思想の檢討に當り、最後に問題になるのは「獨逸國民」の有する意味内容と、其の政治思想に於いて占める役割であらう。

マイネッケの「國家國民（Staatsnation）」と「文化國民（Kulturnation）」の概念を用ひれば、[1] ハルデンベルクはフランス初め一般ヨーロッパ國民を單に國家國民として、而も「前期に於ける其れ」と考へてゐた様に思はれる。從つて一例としてフランス國民を擧げれば、其れは偶々フランス國家なる一個の政治的共同體に包含せられた存在に過ぎず、其の本質的性格に於いては、プロイセン國家に包含されて成立した所のプロイセン國民と何等異るものではないのである。ハルデンベルクにとつてはヨーロッパに於ける一般國民及び國家は、其の地位に於いては獨逸の領邦國民及び國家と等しきもので、獨逸國民自身は「國家國民」ではなくて「文化國民」と考へられて居り、其れは單に一國家を形成して其の枠内に治まるが如きものではなく、より高度なる使命と性格を有するものであつた。

既に一七六四年、ヴィンケルマンは「古代藝術史」を著し、ギリシア古代の藝術を獨逸に紹介したが、其の影響する所は極めて廣く、獨逸一般にギリシア研究を鼓吹する所が少くなかつたのである。又W・v・フンボルトは一七九三年、「古代殊にギリシア人の研究に就いて（Über das Studium des Altertums und des griechischen insbesondere）」を著して、「人間を可能なる限りの多面性と統一に於いて形造ること」がギリシア人の性向であり、ギリシア人の性格の中には「人類の本源的性格一般」が大體現れてゐると說いてゐるのであるが、[2] 此れはギリシア人を以て一個の「人間

的民族（Menschheitsvolk）」と考へたことなのである。斯様な意味で把握されたギリシア人の性格は漸次獨逸人の其れと同一視される様になり、獨逸人こそ今やまさに曾てギリシア人がなした様に眞の人間的民族、卽ち最も純粹な人類の鑑を形成すべき天職を與へられてゐると言ふ高い名譽心が成立したのである。[3]「周知の如く此の思想は、最もありふれたものから最も高貴なものに至る極めて多様な現れ方に於いて、當時の教養ある獨逸人を支配した」[4]のであるが、ハルデンベルクも此の例にもれず、人間的民族としての獨逸人を考へたのである。「花粉（Blütenstaub）」なる題名のもとに集められた一聯の斷片は彼の獨逸人觀をよく現してゐるものであるが、文中彼は次の如く、「……ローマ人の本能的な世界政策と其の傾向とは、獨逸民族の中にもまた存在してゐる。フランス人が革命に於いて獲得した最良のものは、獨逸國民性の一部分である。」[5]「獨逸的なるものは到る處に存在する。獨逸的性格（Germanität）はローマ的性格、ギリシア的性格或ひはイギリス的性格の様に、一個の特殊國家に制限されるものではない。其れは、此處彼處に於いて優れて普遍的になつてゐるに過ぎぬ所の、普遍的なる人間的性格（allgemeine Menschencharaktere）である。獨逸國民性（Deutschheit）は眞正なる大衆性であり、而して其の故に一個の理想である。」[6]と述べて獨逸人の普遍的人間たることを强調してゐるのである。

斯の如き人間的民族たる獨逸人は、ヨーロッパ共同體の中に於いて如何なる役割を擔ふものであつたか。其れは單に其れ自身の內部に於いて幾つかの國家（領邦國家）を成立せしむるのみならず、精神的に——其れは必然的に政治世界への反映を持つが——ヨーロッパ共同體を指導且つ維持すべきものであつた。卽ち獨逸國民は諸々の世俗國家とヨーロッパ共同體との間に立つて、優れた仲介者としての役割を果すものと考へられたのである。此れに就いてハルデンベル

クは次の如く、「獨逸人は長い間ハンスであた。然し乍ら間も無く彼は總てのハンス中のハンスになる筈である。多くの愚かな子供達の事情は獨逸人の事情である。彼の早熟な兄弟姉妹達がずつと前から黴びて腐つてゐる頃に、彼は生活し、思慮深くなり、そして今や彼のみが家の主人である。」[7]「地球構造學者は物理的重心がフェツとマロッコの下にあると信じてゐる。人間學者としてのゲーテは〝マイスター〟に於いて、知的重心が獨逸國民の許にあると考へてゐる。」[8]「獨逸は緩漫ではあるが確實な歩みを以て、他のヨーロッパ諸國の先に立つて行く。諸國が戰爭や投機や黨派精神に忙殺されてゐる間に、獨逸人は文化のより高い時代の仲間にまで、全力を擧げて自己を形成した。而して此の前進は、時を經るに連れて、他の諸國に對する偉大なる優越を彼に與へる筈である。學問及び藝術に於いて、人は一個の力強い醱酵を見る。無限に多くの精神が發揮される。新しい爽快な寶庫が採堀される。學問がかゝる良き手の中に存したことは嘗てなく、又少くともより大なる期待を生ぜしめたこともなかつた……(Christenheit)[9]」。と述べてゐるのである。

かくてハルデンベルクの政治思想は、個々の理想的に把握せられた國家、キリスト教的ヨーロッパ共同體、及び獨逸國民の三者を通じて略々其の構造と形姿を明らかにされたと思はれる。ハルデンベルクの共同思索の相手であつたフリードリッヒ・シュレーゲルもまた世界共和國の可能性を說いて居り(共和主義の概念に就いての試論——Versuch über den Begriff des Republikanismus, 1796)、從つてかゝる類の政治思想は初期浪漫派の一般的特徴として指摘することが出來よう。マイネッケは此れに就いて、「我々はハルデンベルク及びシュレーゲルに於いて、國民生活の充實した個々の國家をより深く評價する傾向とゝもに、個別國家の自律を再び制限しなければならぬ政治的世界主義への傾向を見

出した」と述べてゐるが、斯の如き初期浪漫派の傾向は、序論に述べた如く、全く空想的であり且つ又文學的なものであると言はねばならない。然しながら其れは寧ろ斯様な點に時代性を持つてゐるとも言ふことが出來よう。前世紀の初頭に於いては統一獨逸を表現すべき現實政治的權力は殆どなく、從つて中世獨逸帝國に於いて示現せられた國民的榮光を現代に再現せんことを希求した初期浪漫派にとつて、「獨逸國民」は精神的・觀念的に把握される外はなかつたのである。其れ故獨逸國民の自己意識は、少くともナポレオンに依つて現實政治的且つ精神的な脅威を齎らされるまでは、精神的優越の感情の上に充分休らひ得たのであつた。爾後ナポレオン時代を通じて後期浪漫主義、所謂政治的浪漫主義が勃興し、初期に於ける世界主義的・文學的傾向に對して國民主義的・政治的な性格を强く帶びるやうになり、所謂獨逸保主々義政治理論の成立を見るのである。而して此の派の代表的存在たるアダム・ミュラー（Adam Müller）が其の理論的形成に當つてエドマンド・バーク（Edmund Burke）其の他からの直接的影響を受けたことは周知の所であるが、其の精神的・理念的基礎としては常に此の初期浪漫主義——殊にハルデンベルク——が顧慮されたのである。從つて、かゝる點にこそハルデンベルクに於ける政治思想の意義が存するのであらう。

註（1）F. Meinecke. Weltbürgertum und Nationalstaat. 1 tes. Buch. 1 tes. Kapitel. Allgemeines iiber Nation, Nationalstaat und Weltbürgertum. s. 3～9. に於いて詳細に國家國民と文化國民の概念が說明されてゐる。

（2）Ibid. s. 52.

（3）（4）Ibid. s. 56.

（5）Novalis. Gesammelte Werke. Herausgegeben von Carl Seelig. II. Blütenstaub. s. 23. Fr. 64.

（6）Ibid. s. 41. Fr. 66 a.

(7) Ibid. s. 23. Fr. 61.
(8) Ibid. s. 36~7. Fr. 107.
(9) Novalis. Gesammelte Werke. V. Die Christenheit oder Europa. s. 27.
(10) F. Meinecke. Ibid. s. 81.

永井好信宛福澤諭吉書翰 (二)

○先達中は御歸京拙宅へも御來訪被下候由之處不在にて不得拜眉殘念此事に御座候

爾來不相替御盛之よし每度傳承欣喜に不堪尙此上とも御勉强專一奉存候塾も相替事無之講堂之普請も追々進歩當年中に小屋を上け候樣致度存居候夏來コレラに而は閉口家內一同謹愼用心致居候處先々昨今之處に而は大に鎭靜之標樣に相成り候御地も同樣義併し御用心は怠らざる樣所祈候右御返詞まで申上度早々如此御座候頓首

(明治)十九年九月廿五日　諭吉

永井好信樣几下

尙以先日拜顏を得さりしは遺憾之次第尙其中には重而御出京之義も可有之御待申上候以上

○本月十七日之貴翰拜見仕候如來翰寒氣相增候處益々御淸安奉拜賀過日本塾之競技會は隨分見事に有之演技者中淸岡石毛抔申は最屆强石毛は幅飛十四フート六インチュ是れまで學生之仲間には無き所と申事に候

塾之普請も台石は既に過候に付上棟瓦に取掛り候本年中に積み終り度申居候

近來徵兵令之功能も餘り著しからず私塾に入る者多くして昨今幼稚舍を合して六百名に相成日々英語勉强致し居候

昨日は淺草本願寺におゐてノルマントン不幸者の爲め追吊の大法會を催し塾よりも押出して甚た賑やかなり途中如何と案し候得共夫れ〳〵は誠に靜肅にて漫に大聲を放ちたる者もなし塾風舊に異ならす御安心可被下候

ノルマントン之一條も餘りに騷々度々過るとて政府之筋にても昨今は却て扣目之說あるよし其御地は根本之場所何にても御閙込之義も御度候得は何卒早く御報道奉願候

右御返詞まて申上候頓首

(明治)十九年十一月廿一日　諭吉

永井好信樣机下

(河北展生記)